

石式は御領式の系譜を継ぐ型式であるが、いずれも凹線が沈線に省略され、楕円形押点も小型化する。続く黒川式は鹿児島県吹上町黒川洞穴遺跡を標式とする。黒色磨研の精製浅鉢と貝殻条痕の粗製深鉢が代表である。浅鉢では口縁部の立ち上がりがなくなくなり、沈線で表現されるようになる。深鉢は胴張りする位置が高くなり、立ち上がりをなくした口縁部との間がくびれる。

従来晩期後半に位置づけられていた夜臼式ゆうすに代表される突帯文土器は、弥生時代前期に含められることが多い。

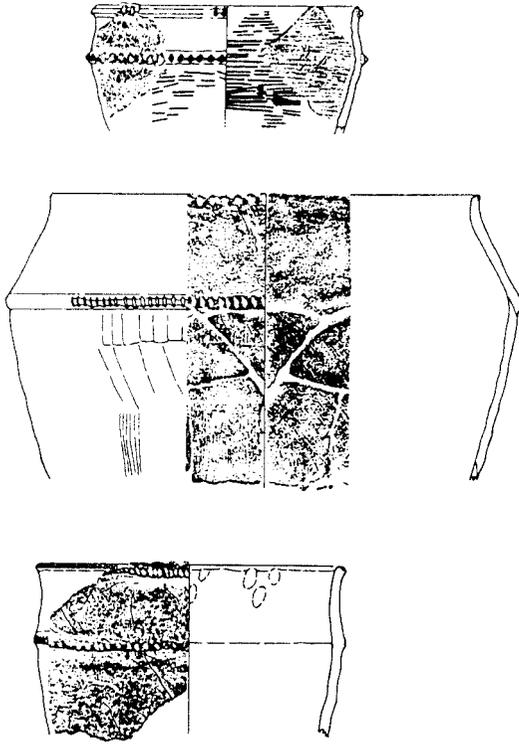


図2-28 突帯文土器

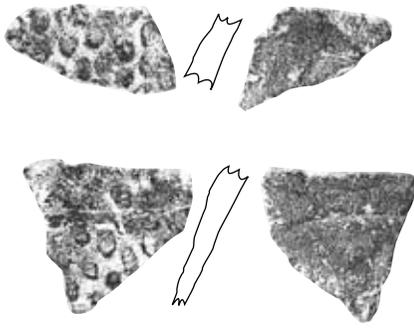


図2-29 黒田二又遺跡出土土器

## 第二節 地域の縄文文化

### 一 勝山町の縄文時代

勝山町内で知られている遺跡は二か所にすぎない。町内の各所でも縄文時代に属する可能性がある石器や落とし穴と推定される遺構が見つかつてはいるものの、時代を特定するための土器が出土しているのはその二か所のみである。これまでに調査した遺跡の出土品の整理が完全に済んでいないため、今後その遺跡数が増える可能性はある。

#### 黒田二又遺跡

黒田二又遺跡は観音山裾に

あたり、県営基盤整備事業に伴い平成十二年に調査された。遺跡は観音山塊から伸びる綾塚古墳が立地する丘陵によって形成された東側の谷の深奥部にあたり、下方には二又池という農業用池が築かれていることからも察せられるように自然湧水が豊富な場所である。調査区は標高

五〇坪付近の狭い稜線から二九坪付近まで下る急峻な斜面の裾の平坦面にあたる。調査区東辺近くの包含層から押型文土器の小片が二点出土している。長軸で一〇センチほどの大型の楕円押型文が施されており、田村式であろう。土器は古墳時代後期の遺構検出面直上から出土しており、同時期の遺構は見当たらない。早期の段階であり、定地性の集落があったというより狩猟目的の短期間の居住の痕跡だと推定される。

### 中黒田遺跡

昭和二十年と三十年に水路改修に伴って土器が出土した遺跡で、町内唯一の縄文時代の遺跡として知られていた。耕作土表面から五〇センチ以上の深さに堆積した砂礫層下層に包含層があり、鐘ヶ崎式・西平式・三万田式・御領式の土器が出土した。当時、打製石斧・磨製石斧・石鏃・石錘・凹石も出土したという。平成十一年度にも県営担い手育成型基盤整備事業に先立ち試掘調査を実施したところその土器発見地点の水田で大量の土器が出土した。やはり土器は耕作土下の砂質土と砂礫層に多く含まれ、南側の微高地上から流れ込んだものと推定される。

発掘調査は平成十二年に実施した。調査地点は、土器が出土した地点の南側で水路から比高差二メートルほどの標高一九メートルの微丘陵上面にあたる。土器を出土した水路側にあたる調査区北側に近づくほど開墾による削平が著しく、ほとんど遺構を検出することができなかった。しかし、調査区の東側から二軒の竪穴式

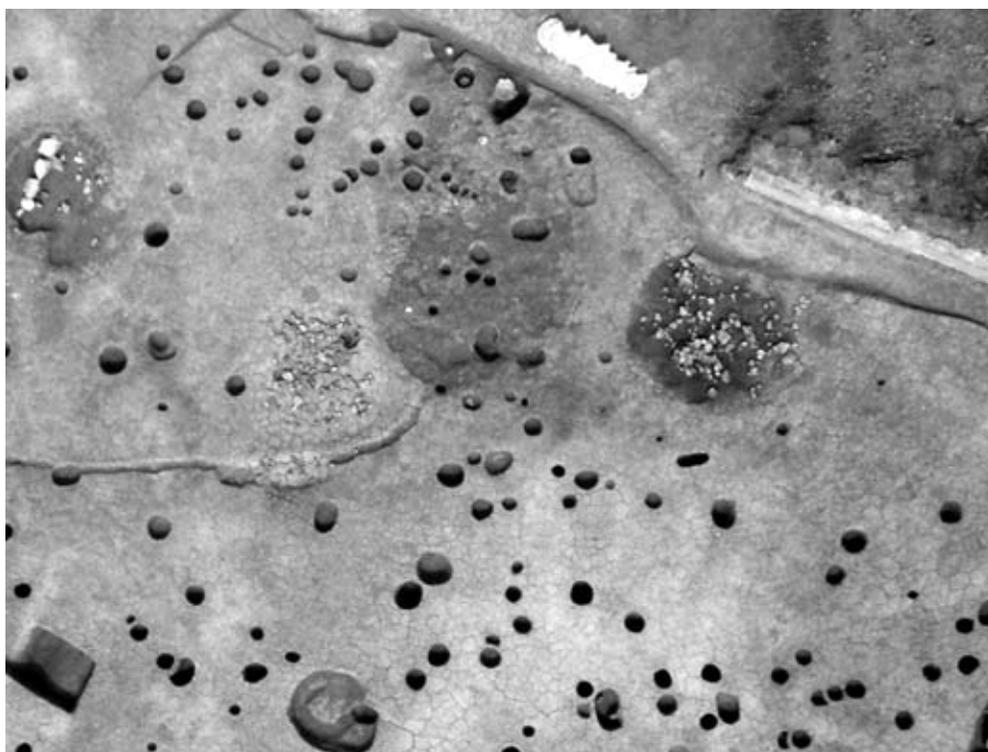


写真2—2 中黒田遺跡2、3号住居跡

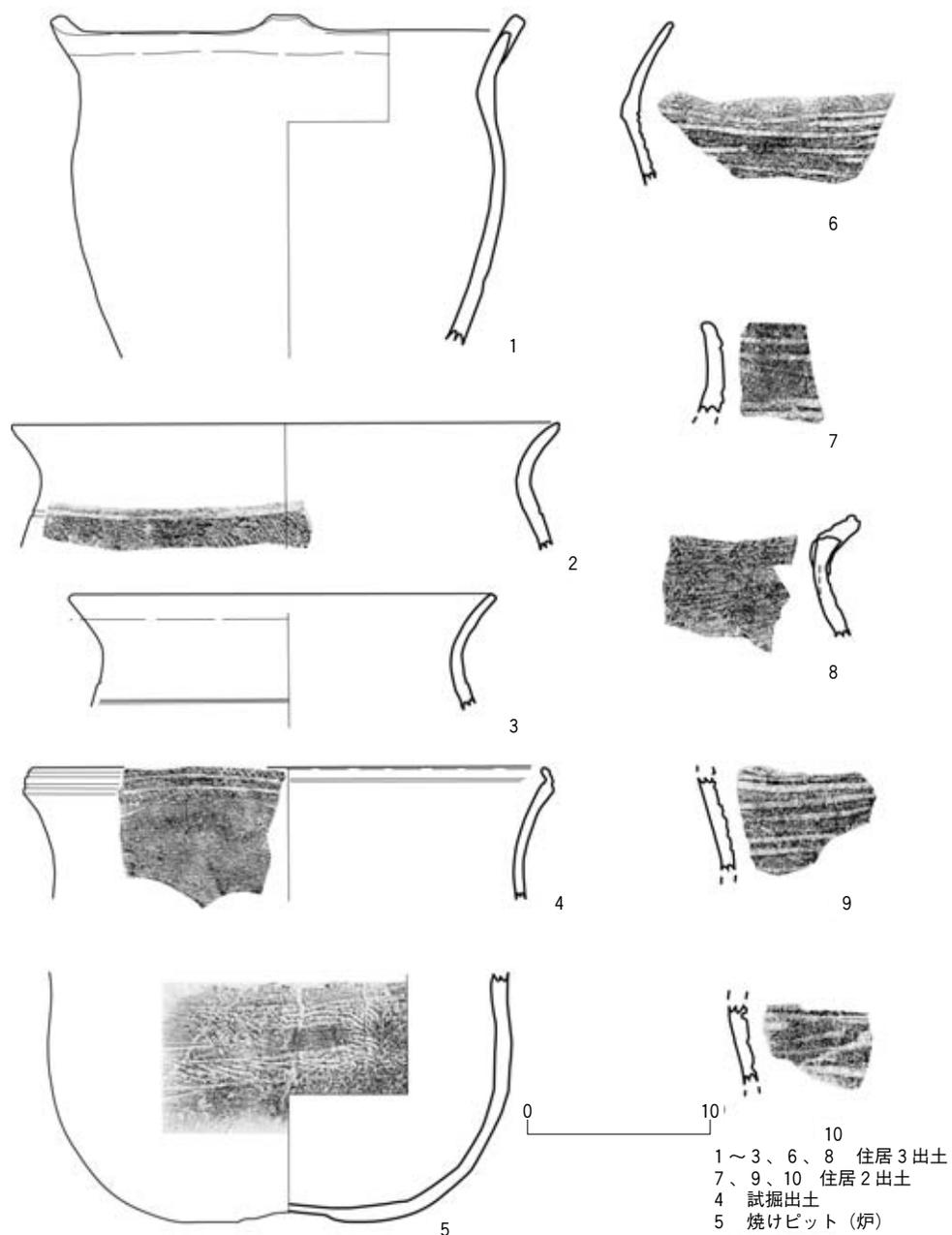


図2—30 中黒田遺跡出土土器



写真2—3 2号住居出土石器



図2—31 中黒田遺跡遺構配置図

住居跡が見つかった。二軒とも、床の中央部が下がる。一号住居は直径二・二メートルの円形、二号住居は直径二・八メートルの隅丸方形で、ともに柱穴は見つかったくない。二号住居からは腰岳産黒曜石の石鏃、サヌカイト・水晶の剥片(写真2—3)と姫島産黒曜石の剥片が出土している。また、少し離れた調査区西側で柱穴が巡る土器埋設炉が見つかった。柱は炉がやや南東に偏するように直径約六メートルで六本並んでいる。炉に使用した土器(図2—30・5)は上部を失っているが、鉢形で器壁は一センチ前後と厚く、胴部の最大径は約三〇センチとなる。胴部の外面にはアナダラ条痕で「エ」字状の文様が施されている。埋設炉の周辺は広く赤変していた。検出した住居の配置と削平状況から見て本来は調査区全面に住居が存在していた可能性が高い。

## 二 京都平野の縄文時代

京都平野周辺での草創期は、築城町本庄大坪遺跡から柏原式土器が出土しているのみであり、様相が不明である。前期になると遺跡数が増え、行橋市竹並遺跡、辻垣遺跡で早水台式、福丸遺跡、苅田町山口遺跡、町内の黒田二又遺跡で田村式押型文土器が出土している。周辺地域でも、先の本庄大坪遺跡のほか、豊津町徳永川ノ上遺跡、犀川町自在丸遺跡、寺門遺跡等から押型文土器が出土している。この時期までは安定化した集落を営む段階には至っておらず、遺物が点在するのみである。